『國民新報』1940年9月29日

[主張]　お役に立とう[[1]](#footnote-1)

　青年訓練所の訓練生の一隊が現役軍人に率ゐられて南小門の坂を上るのが見受けられた。青年に軍事訓練を施し始めたのだ。これは全鮮を通じてなされることになつてゐる。すべての青年は軍事訓練を受けて、何時なんどきでも御国のお役に立たうといふのである。

　御国のお役に立つといふことは、單に國防の一員としてばかりでは無論ない。農場、工場、官廳、會社、その他ありとあらゆる職場に於いて、自分の役目を果たすことはいづれもお國の役に立つことではある。しかし、將に高度國防國家たらんとするわが日本に於いては、國防の一員としての務めに服することこそ、最高のお役に立つことだ。現在軍籍に身を置かないものであつても、何時なんどき呼ばれても直ぐお召しに應じて、お役に立つだけの用意が肝要である。これは特に青年の使命であり特權でもある。青年たるもの平素體位の向上を計り、艱難辛苦の生活に耐へて一死以て皇恩に報ずるの覺悟を固め、修錬おさおさ怠らざるの心掛に生きなくてはならない。

　新體制の準備が整つた。近々愈々中央幹部の組織成り、ついで地方の組織も成つて一億一心大政翼賛の曠古の大運動の車輪が、地軸をも揺がさん大響きを立てゝ、運轉を始めることであらう。そしてその車輪の轉ずるところ、東亞共榮圏の地平らし、基礎固めが、ぐんぐんと進捗する譯だ。

　さて、この大運動の、生命は何處に發するのか。それは一億國民が八紘一宇の大御心を體したてまつり、各々その職場に於いてその役目を見事に果たすことに於いてだ。これを職分奉公と名づけてゐる。國民の各々は老も若きも上なるものも下なるものも、この大機關の齒車であり軸であり調革であり釘である。一つだつてなくてはならぬことに於いて、同じ重要さがあるのだ。

　それにしても、その中心はやつぱり青年にある。國防線上に於いては勿論のこと、産業に於いても何に於いても、その働きの主體は青年層だ。青年に力あつて始めて國に力あり、青年の使命や大である。

　すべての青年は各自御国のお役に立たう。東亞共榮圏完成のありがたき國家目標のために何時なんどき、如何なる方面の職場に召されても直ちにお役に立つやう用意しよう。心の用意、身體の用意、家庭の事情の用意もして置かう。國民は誰もがさうであるが、特に青年は、その有するすべてを――身をも心をも子女をも財産をも　陛下に奉還することから出直さう。是新しい日本人としての再出發なのだ。凡べては　陛下のものである。われは　陛下のものである、といふ信念から再出發しよう。そして　陛下の御召しに應じお役に立ち申すことを一生の目標とすることである。

1. この文章は『國民新報』の影印本から抜け落ちているので、単行本『同胞に寄す』に掲載されたものを入力した。ルビがないのはそのためである。 [↑](#footnote-ref-1)